

縄文時代の漆について2  
 回目は漆製作に関わる出土  
 品について述べたい。漆は  
 ウルシの木に傷をつけて、  
 出てきた樹液を採取する。  
 東京都下宅部遺跡から掻き  
 傷が付いたウルシの木が出  
 土したこと、縄文時代  
 も現代とほぼ同じ方法で採  
 取したと考えられている。  
 採取した樹液には樹皮な  
 どのゴミが含まれているた  
 め、布などで漉して不純物  
 を取り除く。これを生漆と



県重宝 亀ヶ岡遺跡出土漆入り容器  
 縄文時代晩期=青森県立郷土館所蔵

いう。生漆を攪拌して粒子

を細かく均一にする作業  
 (ナヤシ)、天日などで攪

拌して生漆に含まれる水分  
 を除去する作業(クロメ)  
 を行い、より強い塗膜をつ  
 くる漆へ変化させる。

青森県内の遺跡から漆入  
 りの容器や漆を塗る際に使  
 用した土器が出土している。  
 写真の亀ヶ岡遺跡から出土  
 した漆入り容器は、漆液が  
 乾燥する際にできる「ちぢ

板柳町土井I号遺跡から

縄文後期の濫胎漆器や漆塗  
 土器などと共に、酸化鉄の

石を粉にするために使用し  
 た石皿や酸化鉄の石が出土  
 した。津軽半島には酸化鉄

の産地もあり、そこから運  
 ばれた可能性もある。また  
 特別史跡三内丸山遺跡から  
 出土した漆液容器の1点は  
 クロメ漆の上に酸化鉄を混  
 ぜた漆が重なり、赤色漆を  
 作った容器と考えられてい  
 る。

## 青森の漆

### —縄文時代②—

伊藤 由美子

(県民生活文化課

県史編さんグループ

主幹)

み」が土器内に重なってで  
 きていることから、数回に  
 わたつて漆を入れていたこ  
 とが考えられている。

漆はそのままで塗るほか、  
 色として顔料を混ぜて上塗  
 りする。青森県内の縄文遺  
 跡から出土した漆製品に使  
 われている赤色顔料は酸化  
 鉄と水銀朱があるが、多く  
 が酸化鉄(ベンガラ)である。  
 漆を塗った刷毛や漆を掻く

道具など、また見つかった

いないものも多くあるため  
 集落内でのようにして漆  
 を制作していたかはわかっ  
 ていない。

漆製品の断面を観察する  
 と塗り方がわかる。三内丸  
 山遺跡から出土した漆器で  
 は、木胎の表面を固めて上  
 塗りしやすくするために顔  
 料を含まない漆を塗り、次  
 に赤色顔料を入れた漆を重  
 ねて塗っていた。現代と変  
 わらない技法である。現代

縄文前・中期の  
 三内丸山遺跡から  
 は前述の容器の他  
 に、ウルシ種子、  
 漆入り容器、木胎  
 の漆製品などが出  
 されているが、どこでど  
 ように塗っていたのたろう  
 か？

縄文の漆製作はまだまだ  
 わからないことが多いが、  
 蛍光X線による顔料の同定  
 や、FT-IR分析による  
 漆の同定といった科学的な  
 分析も取り入れながら、少  
 しずつ研究が進められてい  
 る。